

随 想

盲、蛇におじず

滝田 満



のっけから差別用語である。「目の不自由な人蛇をこわがらず」では、さまにならない。そのうち「顔の不自由な女性」という表現が、まかり通るだろうという人もある。

昭和22年といえば、戦後まもなくで、食住にことかき、熊谷総長の、日本は10年たったら必ず復興する、第一次大戦後のドイツがそうだったからという言葉も眉唾物で、進駐軍のいう、日本四等国論が、むしろ現実に似つかわしく思えた頃だった。

かの有名な石巻のNK君あたりが中心となり、数名で駄弁を弄しているうち、夢は次第にふくらみ、全国的な組織結成へ進もうということになった。NK君は今とかわり、内村鑑三の流れをくむ無教会派の牧師にいれあげていた。

彼、某君もその一員として、のめりこんでいたのである。いわば学生運動のはしりみいたいののだが、労組用語の「オルグ」様のものを繰返した挙句、東大法文経21番教室(?)で、全国的組織の旗あげをし、GHQ、国会、文部省、三大紙等に手分けして陳情を反復した。彼も、毎日新聞に行

った一人である。イールズ事件や、全学連結成に先立つこと数年、長崎被爆生残りの連中など、蒼い顔をして寒い寒いを連発しながら、左翼的な傾向がでてきたら脱退します、と断固宣言した位だから、運動の性格的なものが判るであろう。

プチブル的と、後年悪口を言われても仕方がないし、今でもそうだが、当時のマスコミの傾向からして、歴史の一頁に残しもしなかったし、それを残念にも思わない。

資金源に就いてはネタがあった。医学生を主体とした「在外父兄救出学生同盟」なるものがあり、その後「在外同胞」と名が変り、援護活動の拡大と共に、引揚学生達だけでは手にあまるようになり、一般学生にまで参加を求めてきたのに便乗したのである。

仙台駅で上下の列車には必ず多少とも海外引揚者が乗っており、乗換乗継の際、引揚者を引率して混雑する列車に優先的に乗りこめたし、又東京の宿所としては、上野寛永寺の庫裡か宿坊かはしらぬが、同盟の宿所兼アジトの如くであったので、それを利用して貰った。食事は、外食は夢物語りの時代だったが、燃料は焼跡にいくらでもあったので、飯盒炊さんのかて飯ですませられ、多少の空腹を我慢すれば、旅費宿泊費の類は殆どかからなかった。余談になるが、爾来、旅行を安くあげることが彼の性癖の一部となった感がする、といえ美辞になるが、要するに貧乏たらしいのである。後年家内同伴の旅に出ても、一人分の旅費で済んだと自慢する救い難い性向の始まりである。

ひところ、順風逆風という言いまわしがあったが、昭和22年、片山社会党内閣の誕生はどんな風の吹きまわしだったのだろう。

気候のいい頃だった。全国遊説の途次、首相以下の各閣僚及び党幹部が大挙して来仙し、演説会

をひらくことを聞きつけたKK君、(仙台東部で開業中)が、東七番丁の菊池養之輔代議士と面識があるから、その紹介で首相への直接陳情をセットして貰い、KK君と彼某君と2人でゆくことになった。当日会場である五橋小学校の焼残り校舎で(学生改革前で、小学校だった筈)KK君と待合わせたが、到頭KK君はあられず、その後も欠席の弁解はなかった。約束の時間が来たので、まよとばかり指定された部屋で只一人待っていると、菊池代議士を1人だけ従えて片山首相の登場となりました。膝を折りたたんでも入らぬ、小学校低学年用の机と椅子、僅か数十厘の距離で対坐し、菊養さんが立会人か介添役或はお目附の役で控えておる。もともとKK君が主役で彼は陪席の積りだったのが一転、主役を演じなければならなくなった。孤立無援という言葉が、一瞬頭の隅をよぎった。医学教育の過去現在及び望ましい未来像について、彼なりに必死の思いで熱弁を振うこと小一時間。人間変な時、変な事を感じたりするものである。一語も発せず、こちらの出した書類に目を向けたまま、彼の話に耳を傾けるかの如きポーズをとる首相の顔を、ある程度余裕ができて、しみじみ眺めていると、綽名はうまくつけられるものだ「グズ哲」とは言い得て妙と、感じたことだった。とまれ一学生の分際で、時の首相に独演会の如き陳情を、さしで小一時間できたことは、その内容は一として具体化されず、失敗だったとしても、時代もあったろうがよくできたものと、表題の連想で想起するとき、背に非生理学的な発汗を覚えるのである。

